



現代天文学史

小暮智一 著

京都大学学術出版会 4,900円+税 A5判 642頁

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

2015年12月初旬に刊行された本書を手にしてまず驚いた。総計634頁プラス付図2葉という大冊なのである。ここ200年にわたる天体物理学の発展が詳しく述べられている。もともと「天文教育」2009年1月号から2012年9月号まで23回をかけて連載された「恒星天文学の源流」という記事が基になっていて、大幅に拡張されている。内容は第1部天体分光學、第2部星の構造と進化論、第3部銀河天文学と宇宙論、そして第4部現代天文学へでは可視光以外の観測結果、高エネルギー天文学の序論が述べられている。難解な数式はほとんどなく非常に読みやすい。扱われた天文学的な内容は通常の教科書に載っている事項が多いが、構成が人物中心になっているという点が大きな特徴である。その点が読者を楽しませてくれる一冊になっている大きな要因である。

例えば、19世紀末から20世紀初頭にハーバード大学天文台長であったピッカリングは多くの女性を助手として雇い、後にその中から天文学史上に名を残した女性天文学者を何人も輩出したことは広く知られている（本書にも4人登場する）。ところが、ピッカリングが女性を多く雇った理由の一部は、当時の賃金の男女格差が大きかったことにあった。このような社会の歴史の一面が普通の天文学教科書に書かれることはまずない。天文学史上に重要な業績をあげた人物（フラウンホーファーから始まって90人以上）を取り上げ、まずその人の生い立ち、受けた教育、研究や社会的活動などが簡潔にまとめられている。しかも人物ごとに肖像画（または肖像写真）が載せてある。この部分から時代と人物像が鮮明に浮かび上がっ

てくる。

次に主な研究の内容が解説されているが、前段の内容と合わせるとその研究の歴史的な意義がおのずと理解できるように書かれている。人物ごとの評伝や主たる論文の文献表が巻末にあって、これが何と！全42ページにもわたっている。その中には19世紀の出版物多数も含まれ、ネット上で検索して読める物が多い。初めて目にする文献が多く、これにはまると横道にそれてしまうが、これぞ正に読書の醍醐味と感じるのはおそらく筆者らだけではなかろう。文献情報と合わせて資料蒐集と原稿作成に費やした労力、さらには校正の作業をやり遂げた精神の集中力を考えると驚きを禁じえない。著者の年齢（1926年生れ）を思うとなおさらである。

この本は教科書で得た知識をより深く理解するうえで役立つ。例えばHR図（ヘルツシュプルング・ラッセル図）は天文学を学ぶうえで必須の項目であるが、本書を読み進めると19世紀後半に恒星スペクトルの物理的理解が進み、多数の恒星の距離を測定する努力が積み重なって、20世紀初頭にそれらの成果を組み合わせたHR図が歴史的な必然として登場したことが理解できる。

天文学研究者や一般の愛好家はもちろん、高校生や大学生に薦めたい。高校や中学校の理科の先生には授業のネタ本としてお薦めである。シニアの人には学生時代に学んだ（そして長らく忘れていた）断片的な知識が本書によってよみがえってくることを保証します。

定金晃三（大阪教育大学）
作花一志（京都情報大学院大学）